第三三四回（五〇九回）〈読書会〉例会資料

テクスト『ロマン・ロラン伝』ベルナール・デュシャトレ著　村上光彦訳

二〇一六年一月三十日（土）午後二時―四時　作成　清原章夫

今月の音楽

一．モーツアルト（墺・一七五六～一七九一年）　アダージョ　ロ短調　K．五四〇

（一）曲目解説　一七八八年に作曲された、珍しいロ短調の小品で、誰のために書かれたのか、わかっていない。

音楽学者のアルフレート・アインシュタインはこの曲について「モーツアルトがかつて作曲したもののうちで最も完璧で、感覚的で、最も慰めのないものの一つである。長調の終結部は、この曲が或るホ短調ソナタのためのものだったことを暗示する。しかしこのような作品が、困難であると同時に幸福だった時期に、別に《目的》もなく、モーツァルトのペン先から流れ出しえたのだと、単純に言ってしまったらいいのではなかろうか？」と述べている。

（『モーツァルト、その人間と作品』　浅井真男訳、白水社　三三四頁）

また、『ロマン・ロラン伝』では、一九三九年十月、ヴェズレーに立てこもった、ロランの様子が以下のように描写されている。「彼には、時間は長く、孤立はつらく思えた。晩にはしばらくピアノを弾いた。ただし、疲れてきて、激しくて急速な楽章の演奏に必要な力はなくなってしまった。穏やかな、それとも深みのある楽章、たとえば『作品一〇六』のアダージョとか、オリヴィエがジャン‐クリストフに弾いて聞かせた、モーツアルトの憂鬱なアダージョのように安らかな楽章を弾くだけにした。」（『ロマン・ロラン伝』三八八頁）

ここにある、オリヴィエがジャン‐クリストフにこの曲を弾いて聞かせた場面を次の頁に記載した。

実際に、曲を聴いてみると、オリヴィエの全体像が文章を通してより、直感的に一瞬で把握できるから不思議である。

（二）演奏　マイセル・メイエル：ピアノ（録音：一九四九年　演奏時間：約八分）